

冬になると古傷が

心身共にチクチクと痛む

岐阜県 加藤 稔

昭和十九（一九四四）年十月、満州琿春県春化第一
三二〇部隊に入隊。

昭和二十年八月九日は、突然満州へ侵攻してきたソ連軍と春化で激しい戦闘をしました。しかし、残念ながら物量を誇るソ連軍に抗すべくもなく、やがて投降をした。その戦いで大腿部に負傷をして倒れていたところを収容されましたが、何の手当ても受けることなく、あり合わせの布きれで包帯代用、出血だけを止めて、そのままシベリアに送られました。

九月の末、ムーリンあたりだったと思います、到着しました。作業は主として伐採でした。負傷したものを十分な手当てもすることなく作業に駆り出され、何の治療も受けず、後遺症が残り、冬になると古傷が痛

み出します。

不運といえればそれまでかもしれませんが、こんな非人間的な行爲が許されてよいものかと、思い出すたびに心の中までチクチクして怒りが込み上げてきます。

それでも命あつて帰国出来た私達は、幸せかもしれない。

かの地で若い命を落とした多くの戦友達の無念を考えると断腸の思いです。せめて安らかに眠ってくれと日夜祈っております。

昭和二十四年八月、大郁丸にて舞鶴上陸帰国、復員をしました。

今は幸いに温かい家庭に生まれ、平和に暮らしております。

あんな事があつたのが夢のようです。しかし、今はせめて私達の苦勞が決してムダではなかったと胸を張って生きていける、そんな世の中にしてほしい、ただそれだけを願っております。